



ルミナ・

リリウムの揺り籠

【苗木♡】

【女の子プランター♡】

【容赦ない植物姦♡】

【オルガフロンティア】シリーズ

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

ルミナ・リリウム^①の揺り籠



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・宇宙インフラモノ

「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

1.ペルセポネの百合

聖暦2050年。

人類が荒廃した地球を後にして数十年。

惑星ペルセポネは、連合が『次世代の生体エネルギー（オルガシステム）』——すなわち女性の性エネルギーを動力源として搾取するための資源を求めて開拓を進める、緑豊かなテラフォーミング惑星である。

息苦しい効率至上主義と無慈悲な管理が支配するコロニー社会の影で、地球から持ち込まれた動植物が新たな生態系を築く一方で、この星の原生生物たちは、したたかに、そして静かに息づいていた。

世界統合連合の環境調査部門に所属する植物学者のセラは、原生林の奥深くへと足を踏み入っていた。

まだ19歳という若さだが、その情熱と知識は植民地の誰よりも深い。

人間の醜い欲望や管理システムが届かない、手付かずの純粋な自然への憧れが、彼女の足を危険な深部へと突き動かしていた。

桃色の長い髪を邪魔にならないよう後ろで結び上げ、強化ポリマー製の環境防護服に身を包んだ彼女は、未知の生態系をその知的な琥珀の瞳に映し出している。

「見て、アラン。このシダ、地球のものとは胞子の付き方が全然違う……！」

通信機越しに、同じ調査部門の先輩研究員であるアランの呆れたような声が響く。

『セラ、あまり深入りはするなよ。日没までには必ずベースキャンプに戻ってこい。最近、原因不明の失踪事件も起きているんだからな』

「分かってるわよ。規定の安全距離は保つし、防護服のバイタルも正常。用心してるから」

口ではそう答えながらも、セラの足はさらに森の奥へと向かっていた。

夜の闇が訪れると、森の特定の区画で淡い燐光を放つ不思議な植物が目撃されている。

連合の資源探査隊（正規軍）に見つかれば、ただのエネルギー資源として無残に刈り取られ、搾取のシステムに組み込まれてしまうだろう。

同じ連合の末端組織に身を置きながらも、彼女はその狂った効率至上主義に反発し、純粋な未知の花の生態を学術記録として保護しなければならないと焦っていた。

燐光現象は日没直後の特殊な環境下でしか観測できないという推測が、彼女を一人で深入りさせている。

陽が傾き、ペルセポネの空が茜色から深い藍色へと変わる頃。

月明かりに照らされた小さな泉のほとりで、彼女はついにそれを見つけた。

大輪の百合に似た花々が、まるで天の川の欠片を散りばめたかのように、青白い光を放ちながら群生している。

「.....きれい.....」

思わず漏れた吐息が、ヘルメットのバイザーを僅かに曇らせる。

その花——セラが密かに「ルミナ・リリウム」と名付けたそれは、
抗いがたい魔力で彼女を惹きつけた。

胸の奥から湧き上がる興奮を意志の力で押さえ込み、セラは植物学
者として慎重に手順をなぞる。

規定の観察距離で立ち止まり、腕の環境スキャナーを起動して大気
中の成分分析を試みた。

だが、異変はスキャナーが結果を弾き出すよりも早く起きた。

甘く、それでいてどこか痺れるような香りが、完全気密のはずの防
護服の隔壁越しに微かに届くような錯覚を覚える。

『警告。吸気フィルター隔壁に致命的な損壊。酸素濃度低下』

唐突に、ヘルメット内で無機質なシステムAIの電子音声が鳴り響いた。

「え……？ フィルターが？」

セラの表情が強張る。

視界の端で、バイザーの透過パネルにエラーの赤光が瞬いた。

スキャナーの警告すら間に合わない。

花の放つ青白い燐光は、単なる光や花粉ではない。

人類の計測機器の検知をすり抜けるほど極小の腐食性胞子が、ポリマーの分子結合を瞬時に分解する超強力な酵素反応を引き起こし、防護服の循環系を満たす呼吸用の高濃度酸素を触媒として、その溶解を爆発的に加速させていたのだ。

命を守るための生命維持システムそのものを逆利用する、未知の生態系の凶悪な生存戦略。

絶対の安全を保証するはずのナノメッシュが、瞬く間に原形をとどめぬ粘体へと崩れ落ちていく。

『セラ？ そろそろ時間だぞ。応答しろ。……おい、バイタルに異常値が出ているぞ！』

アランの声が遠のいていく。

まずい、戻らないと。

植物学者としての知識が、目の前の現象の異常性を瞬時に弾き出した。

しかし、頭では逃げなければならないと分かっているのに、身体が動かない。

すでに極微量の胞子を吸い込んでいたセラの神経伝達系に、痺れるような快感のノイズが走り、致命的なラグを引き起こしていた。

ふらふらと泉に近づいてしまったセラの足首に、何かが絡みついた。

「ひゃっ……！？」

花の根元から伸びる、ぬるりとした太い蔓だった。

驚いて引き抜こうとするが、次の瞬間、強烈な力で足が後方へ引き込まれる。

硬質な破断音と共に、人間の筋力を補助するはずの人工関節ジョイントが、蔓の圧倒的なトルクに耐えきれず無慈悲にへし折られた。

絶望的な減圧音が森に響く。

完全に気密が破れた防護服の裂け目から、蔓が分泌する強酸性の粘液と、本命である高濃度の幻覚フェロモンガスが暴力的に注ぎ込まれてくる。

焼け焦げたポリマーのオゾン臭を塗り潰すように、むせ返るような甘い匂いがセラの鼻腔を、肺を、そして脳髄を直接蹂躪した。

蔓はさらに数を増し、引き裂かれた装甲の隙間から彼女の柔らかな肉体に直接絡みついてくる。

太ももを、腰を、そして豊かな胸を、まるで愛撫するかのように這い上がっていく。

「や.....やめて.....っ！」

抵抗しようにも、身体に力が入らない。

生物としての生存本能が死の恐怖を叫び、植物学者の知識が逃れられない未知の生態系の脅威を理解して絶望する。

しかし、本能の警鐘も理知的な悲鳴も、全身を這う蔓の生々しい感触と、脳髄を直接蕩かすフェロモンの前では無力だった。

理性を司る琥珀の瞳が、急速に甘い快楽に濁っていく。

思考が一瞬にして白く染め上げられ、彼女の身体は燐光を放つ泉のほとり、巨大な根が絡み合う暗がりへと引きずり込まれていった。

2.妖花との交わり

装甲の裂け目から侵入した無数の蔓は、セラの柔らかな肉体を逃がさぬよう容赦なく拘束していた。

泉のほとりの冷たい湿土の上。

結い上げていた桃色の長い髪がほどけて泥にまみれ、蔓に縫い留められ身動きの取れない彼女の目の前で、一際大きく輝くルミナ・リウムがその花卉をゆっくりと開いていく。

花の奥から現れたのは、象牙のように白く、先端が丸みを帯びた一本の太い雄しべだった。

それは生き物のように脈動し、ぬらぬらとした透明な粘液を滴らせながらセラの眼前へと迫る。

「いや……っ！　なんで……どうして……っ！？」

混乱と恐怖で、理知的な琥珀の瞳から大粒の涙が滲んだ。

雄しべは引き裂かれた防護服の隙間から滑り込み、彼女の柔らかな下腹部をぬるりと不快な温度でなぞった。

びくりと震えるセラの身体を無視し、恐怖の汗と混ざり合って湿り始めた秘裂を強引に押し広げる。

「ひい……！だ、だめ……っ、そんなところ……っ！」

羞恥と嫌悪で顔を背けようとするが、蔓が彼女の顔を強制的に花の中心へと向けさせる。

雄しべの先端が敏感な肉壁に触れ、ゆっくりと、しかし圧倒的な力で侵入してくる。

それは人間の生殖器などではない。

表面を覆う微細な繊維質と、花粉を擦り付けるための無数のザラついた突起が、柔らかな粘膜を容赦なくゴリゴリと削っていく。

悲鳴や涙など一切意に介さず、ただ機械的に受粉の作業を進める植物の冷酷無比な異質さがあった。

同時に、背後に回り込んだ別の太い蔓が、無防備な蕾をぬるりと押し開き、腸内へも侵入を果たした。

母体の水分と熱を直接吸収するための、冷たく硬い「根」だった。

「いやああ……っ！ あ、痛っ……あう、そこも……んっ……！」

前後から同時に規格外の異物がこじ開けてくる感覚に、セラは悲鳴を上げた。

未経験の狭い腸管が無慈悲に拡張され、内臓が押し上げられる。

息もできないほどの身体的な破壊の恐怖。

雄しべはセラの身体の奥深くへと突き進む。

内壁を優しく、しかし執拗に擦り上げ、子宮の入り口に到達した太い先端は、まるで意志を持つ生き物のように脈動し、閉ざされた扉を荒々しくノックし始めた。

(駄目.....これはアルカロイド性の神経干渉.....っ、痛覚が.....書き換えられて.....)

植物学者としての理知が必死に警鐘を鳴らし、自身の肉体に起きている凶悪な化学反応を論理的に分析しようとする。

だが、致死量のフェロモンガスが息もできないほどの激痛を、脳髄を灼くような甘い麻痺へと強制的に上書きしていく。

冷たい植物の粘液と、セラ自身の熱い愛液が混ざり合い、ぬちゃり、といやらしい水音を立ててこぼれ落ちる。

(いや.....こんなの.....でもっ.....あ.....きもち.....い.....っ)

心の悲鳴とは裏腹に、肉体は歓喜の波に打ち震えていた。

激しい抵抗の言葉は、いつしか逃げ場のない快樂の喘ぎ声へと変貌していく。

高濃度のフェロモンガスが見せる幻覚が、セラの視界を極彩色の甘い夢へと歪ませた。

背中を汚す冷たい泥の感触は温かいベッドへと変わり、彼女を蹂躪する異形の植物は、最愛の恋人の姿へとすり替わっていく。

胸を揉みしだく蔓の冷たさも、腸内を蠢く硬い根の異物感も、粘膜を削るザラついた突起の感触すらも、すべてが脳内で極上の愛撫へと変換されていく。

「あ.....あぁんっ.....♥ もっと.....すき.....っ」

現実と幻覚の区別が完全に失われた。

客観的に見れば、彼女は太い植物の器官によって前後の穴を極限まで押し広げられ、桃色の髪を泥と青臭い粘液で汚し、涎にまみれてだらしなく痙攣しているに過ぎない。

人間としての尊厳は完全に喪失していた。

しかし、セラの意識の中にあるのは、愛しい恋人に優しく抱かれているという至福の幻覚だけだった。

セラは自ら腰をくねらせ、自らを貫く雄しべをより深くへと求め始める。

子宮を的確に叩く荒々しいノックに、胎内が歓喜の震えを返す。

彼女の意識はもはや、種を受け入れるためだけの純粹な雌としての至福に満たされていた。



「おねがい.....っ.....もっとお.....わたしを、めちゃくちゃにしてえ.....♥」

異常な恐怖と極限の快楽。

その強烈な感情の振り幅がもたらす莫大な生体カロリーと発熱を、ルミナ・リリウムの根と雄しべは貪欲に搾取し、完璧な苗床を構築する。

それこそが、のちに連合が目をつける『極上のオルガエネルギー』の源泉であり、この妖花の凶悪な生態ロジックだった。

雄しべの動きが限界まで加速し、歓喜に開いた子宮の入り口を激しく穿った。

その瞬間。

セラの身体の奥深くで、何かがぷつりと弾ける生々しい感覚があった。

温かく、どろりとした未知の液体。数億の胞子を孕んだ花粉囊が、子宮の最奥へ暴力的に注ぎ込まれる。

「ひぎゃあああああんっ……♡♡」

言葉にならない絶叫が夜の森に木霊する。

生命の根源を書き換えられる絶対的な快感の奔流に飲み込まれ、セラの意識は完全に途絶えた。

開拓地の優秀な植物学者の知性は死に、ただ植物の異常な超代謝を支えるための苗床だけが、青白い磷光の中でピクピクと痙攣を続けていた。

【極秘資料】特異原生植物『ルミナ・リリウム』

生態および運用設定



文書コード: ULA-BIO-LL-001 (Level 5 Classified)

対象年代: 聖暦2050年～2055年

管轄: 世界統合連合・第七生態系研究所(ヘカテ・ステーション)

1. 基本情報(Overview)

- 学名/通称: ルミナ・リリウム (Lumina Lilium / 光る百合)
- 原産地: 植民惑星ペルセポネ・赤道直下原生林「夜想の森」
- 外見的特徴: 夜間に青白い燐光を放つ大輪の百合に似た花卉を持つ。強烈な甘さと痺れを伴う芳香を放ち、獲物を誘引する。通常の土壌での繁殖力は極めて低く、数十年に一度、僅かな種子しか自然発生しない。

2. 異常繁殖プロセス(Reproductive Mechanism)

本植物の最大の特徴は、「人間の女性の生殖器官(子宮)と性エネルギーを苗床とする」という、極めて特異で冒瀆的なパラサイト(寄生)生態にある。

- **フェーズ1: 誘引と捕縛(Trap & Bind)** 花粉に含まれる強力な幻覚・麻酔成分により、対象(女性)の理性を奪い、生存本能を麻痺させる。その後、地表から伸びる強靱な蔓(つる)が対象の四肢や胴体に絡みつき、逃げ場のない「開脚姿勢」へと強制的に拘束する。
- **フェーズ2: 交接と強制絶頂(Intercourse & Climax)** 花の中央から、象牙のように白く丸みを帯びた太い「雄しべ(挿入器官)」がせり出し、粘液を滴らせながら対象の秘裂へと侵入する。雄しべは対象の膣壁や子宮頸部を物理的に擦り上げ、同時に強烈な快樂物質を分泌する。
- **フェーズ3: 受胎(Implantation)** 本植物の種子が発芽するには、女性が極限の絶頂に達した瞬間にのみ発生する高純度の「オルガエネルギー」が絶対条件となる。対象が理性を焼き切れ、悲鳴のような絶頂を迎えた刹那、雄しべの先端から数億の胞子を孕んだ「花粉囊(種子)」が子宮の最奥へと暴力的に射出・充填される。

3. 苗床化と終焉(Gestation & Blooming)

受胎した女性は、摘出不能な「生きた植木鉢」となる。

- **同化と搾取:** 種子は胎盤のように子宮内膜に根を張り、母体の血管や中枢神経系と完全に癒着する。女性の腹部は急速に膨張し、皮膚には青緑色の葉脈のような模様が浮き出る。
- **開花(死):** 種子が成熟すると、母体の命を最後一滴まで吸い上げ、産道(膣口)を押し広げて青白い燐光を放つ太い茎を伸ばす。やがて巨大で妖しい一輪の花が咲き誇るのと引き換えに、母体は恍惚の笑みを浮かべたまま完全に枯死する。

4. 戦略的価値 (Strategic Value)

この花が持つ恐るべき力は、単なる危険植物の枠を超え、連合の覇権を決定づける軍事資源として極秘裏に転用されている。

- オルガ出力の爆発的増大：ルミナ・リリウムの成分から精製された新型薬液をオルガマシンのパイロット(生体部品)に投与すると、エネルギー変換効率が劇的に向上し、ピーク出力が**30%～40%**増大する。これにより、安価な無人機(ハウンド)の群れがエース機に匹敵する性能を獲得する。
- サイコ・コントロール：花粉の幻覚・麻酔成分を応用することで、生体ユニットの恐怖や苦痛を強制的に「多幸福感」へと書き換えることが可能となり、より残酷で長時間のエネルギー搾取が実現する。

5. 工業化された受胎：『百合の揺り籠(リリウム・クレードル)』

自然界での非効率な繁殖を克服するため、連合は軌道ステーション「ヘカテ」の最奥部に、ルミナ・リリウムを量産するための巨大生体プラントを建造した。

- システム概要：反逆者や下層階級から強制徴募された数千人の女性(苗床体)が、全裸でカプセル型ベッドに拘束されている。
- 全自動生産ライン：機械アームが彼女たちの秘部に金属製オルガデバイスを挿入して強制的に絶頂させ、そのエネルギー放出の瞬間に、別のインジェクターが正確に花粉嚢を子宮へ叩き込む。
- ここは生命の誕生ではなく、ただ冷徹に「兵器の材料」を孕ませ、咲かせ、そして収穫後に枯れた少女の肉体を廃棄し続ける、連合の効率至上主義が産み出した究極の地獄である。

作品名：ルミナ・リリウムの揺り籠

発行日：2026年5月26日

発行者：XYZ_L

連絡先：<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
